

東アジア¹⁾の日本像²⁾

－韓国併合後と日中戦争期の両国指導者の言動を中心に－

久保田 武¹

初めに

本稿の目的は、植民地時代の韓国³⁾と日露戦争から日中戦争期の中国について、当時の両国指導者の言動から彼らが抱いた日本像を探り、今日の日本が参考にすべき資料として提示することである。

最近、この両国と日本の関係は良好といえない。お互いに非難せず関係改善を進める努力が大切であることは、大方の一致した意見であろう。そのために、この小論が万分の一でも貢献できれば、筆者として望外の喜びである。

構成も内容も簡単で短くし、指導者の日本像に絞って書いた。選んだ高名な指導者たちについては李承晩を除き膨大な先行文献があるので、その中を丹念に拾えば、この小論で扱っている彼らの日本像はあちこちに散見できよう。しかしこの表題だけに絞って提示した先行文献を、勉強不足な筆者はまだ知らないのであえて書くことにした。もしすでに存在するときは筆者の不明をお詫びしなければならない。御存じの方は、是非お教え頂きたいようお願いする次第である。

参照した資料は、もっぱら指導者本人が執筆したもの、彼の談話が記載されたものを参照したが、伝記、歴史書、研究論文、両国の教科書も若干併用した。いずれにせよ、筆者が新しい結果を発掘したわけではなく、新しい研究成果を出したわけでもない。過去に発表された資料・研究成果から選んで構成したものであることをお断りしておく。

1. 中韓両国の日本像悪化の背景

中国及び韓国と日本の間には、日本の開国以後敗戦に至るまで、お互いに対等で友好的な隣国関係を持てた期間は短かったように思う。特に日露戦争以後太平洋戦争終了まで中韓両国の指導者と多数の庶民が抱いた日本像は悪化の一途をたどった。その背景として中国、韓国側には、自力で近代化できなかったことが、日本側には、自力で近代化に成功しただけでなく、近代化に遅れた両国を侵略して日本の被害者にしたこと⁴⁾、そのうえ両国を見下し、軍事力を背景にした高圧的な態度

1 日本教育大学院大学 学校教育研究科

で接したことがあげられると考える。東アジア三国の近代化に関連して、毛利敏彦が、1992年中央公論4月号に「日韓中『近代化』比較考」と題する興味深い論文を発表し、日本だけが近代化に成功した決定的要因に、明治維新の有無を挙げている⁵⁾。

近代化に遅れた両国には、日本の近代化手法を学び、改革と革命達成の援助を求めて来日した人々も少なくなかった⁶⁾。孫文⁷⁾、蒋介石⁸⁾、汪精衛⁹⁾等はその例である。また日本側でも犬養毅¹⁰⁾、宮崎滔天¹¹⁾に代表される人々が彼らを積極的に援助し、強い信頼関係を結んでいる¹²⁾。しかし日露戦争後日本政府は清国の抗議を容れて日本（特に東京）に集結していた中国革命青年に規制を加えるとともに、日本留学には清国公使館の紹介状を必要とするよう改めた。このため反清朝運動に関わる青年に留学の門戸が閉ざれ、これに憤慨し日本を去った活動家学生は2千人に達し、革命後の日中友好を阻害する要因の一つとなった。さらに大正時代に入って21カ条要求¹³⁾のような日本の横暴な要求は、中国側の反日感情を急速に強めた。

一方韓国では1910年の韓国併合以後日本への感情は決定的に悪くなった。これから国別に、両国指導者が抱いた日本像を提示する。

2. 中国指導者の日本像

この小論では立場が全く対照的な次の二人の指導者の自著から、日本に対する考え方を比較提示する。

(1) 蒋介石 (1887~1975)

日本が、中国領土内に踏み込んで戦争を始めたのは満州事変(1931.9.18~)からである。そして日華事変一日中戦争(1937.7.7~1945.8.15)一の勃発後全面戦争に突入した。この時期中華民国の指導者は、蒋介石主席であった。そこで、まず彼の日中戦争時の日本像を紹介する。

彼は1906年19歳の時日本に二度目の留学をしたが1911年辛亥革命勃発で帰国し、孫文に従って新しい国造りに従事した。孫文没後は軍閥抗争を勝ち上がり国民党と中華民国の実権を握った。蒋介石個人については、これまで数多くの文献がある。最近でも、筆者の知る限り近年詳細な研究書が2冊出版された¹⁴⁾。いずれも「蒋介石日記」を使った研究成果を問う大作である。しかしこの小論では紙面に限りがあるので、これら大作が引用していない資料を使い、蒋介石が日中戦争終了までに、自国民と日本国民に呼びかけた書の中から二編を選んで紹介する。いずれも蒋介石の人格・識見と日中関係を憂える彼の心情が伝わってくる名文である。同時期の日本の軍と政界、言論界の指導者の言動と比べ、指導者の識見の差を感じざるを得ない。

①「日本国民に告ぐ」¹⁵⁾ 蒋介石 1938.7.7 要旨は白揚社編集部一部削除修正

要旨：「本文は蔣主席が『7.7周年記念日に日本国民に告ぐ』と題しわれわれに寄せた書である。

同主席はわが軍閥の悪行を憎むとともに日本民衆に限りない信頼の念を寄せ、『中国は日本軍を敵とするが、日本民衆を敵とするものでなく、むしろ共同して日本軍閥を倒さんことを希望するものである』と日本民衆に対する意向を明らかにした。蔣主席の意向は終始一貫しており、その不動の信念は、終戦に際し『暴を以て暴に報ゆる勿れ』と自国民を戒めたことに現わされたのである。」

本文引用部分—紙面制約のため一部省略修正あり

「中日両国は元来兄弟の間柄である。民族と文化両面において浅からぬ関係にある。隋唐の昔から中国の文化は総て貴国に摂取されている（中略）。

しかるに貴国軍閥は、民国 20 年（1931 年）秋、われわれが水災救恤に寸暇ない状態にあるに乗じて突然東北数省を占領した。（中略）以来毎年のように侵略を行い、その方法は悪辣を極めた。諸君、試みに立場を代えて考えて頂きたい。昨年の今日貴国の軍部は一貫した侵華計画に基づき『盧溝橋事変』を発動してわが華北に侵攻するに至った。8 月 13 日には上海を攻撃した。わが全国民の忍耐は限度に達し、抗戦を発動したのである。（中略）

戦争勃発以来貴国の最も重大な損失は、道徳上の損失である。諸君は貴国の出征軍隊がすでに世界で最も野蛮にして最も破壊力を有する軍隊であることを知っているであろうか。諸君は貴国が常に誇ってきた『大和魂』と『武士道』すでに地を払って存せぬことを知っているであろうか。毒ガス・毒ガス弾は遠慮なく使用されている。（中略）占領したどの地区においても略奪、暴行火付けを行った余勢で、避難できなかった無辜の人民および負傷兵士に対しても大規模な屠殺が行われた。また数千人を広場に縛してこれに機銃掃射を加え、あるいは数十人を 1 室に集めて油を注ぎ火炙りに処し、甚だしきに至っては殺人の多少を以て競争し、互いに冗談の種としている。

（中略）私は言うに忍びないが、言わざるを得ないことがある。わが婦女同胞に対する暴行である。10 歳前後の幼女から 50、60 歳の老婦に至るまでその毒手に遭い、甚だしきは全家族難を免れぬものさえあった。あるいは数名によって代わり代わりに汚辱され辱めを受けた後即座に殺害されたものもある。あるいは母、娘、姑、嫂ら数十人の婦女を裸身で一室に集合せしめ、姦淫を加えた後惨殺し、胸を割り、腹を抉ってもなお満足せざる非人道の暴行を施している。貴国は昔より礼教を尊重し、武徳を崇敬し、世界より称賛を受けていた。しかるに今日貴国の軍人の行為上に表現せられたものは単に礼教が地を掃い、武徳漫然と流れるのみかただちに人倫を絶滅し、天地に違逆せんと欲している。」（後略）

②「暴を以て暴に報ゆる勿れ」¹⁶⁾ 1945. 8. 14. 蔣介石 於重慶

冒頭要旨：「蔣主席は 8 月 13 日日本のポツダム宣言受諾の正式回答に接し翌 14 日朝、ラジオを通じ、全世界および全中国民衆に対しこの演説を行った。蔣主席はキリストの言葉を引用して中国民衆の日本人に対する暴挙を戒め、不動の信念たる真の日華親善には先

ず道義の必要なることを、われわれに示唆したのである。」

本文引用部分—紙面制限のため一部省略修正あり

「余はキリストの山上の教えの中にある『汝己の如く人を愛せよ』および『汝の敵を愛せよ』の二句を思い出し実に限りない感慨の湧くのを覚える。

同胞諸君。われわれ中国人は、旧悪を思わず、人に善をなす、と云うことがわが民族の伝統的な特性であり、われわれが一貫して声明したのは『われわれは日本軍閥を敵とするが、日本人民を決して敵と認めない』と述べたことを思い出さなければならない。(中略)われわれはただ憐憫を表示し、彼らをして自らその錯誤と罪悪を反省せしめんとするだけである。もしも暴を以て敵のこれまでの暴に報い、凌辱をもって彼らのこれまでの誤った優越感に応えるならば、恨と恨は相報い、永久にとどまることはない。これは決してわれわれ仁義の師の目的ではない。このことはわれわれ軍民同胞の1人ひとりが注意しなければならないところである。(後略)」

この信念により、蒋介石は、中華民国として日本政府に賠償を求めず、ごく少数の重い戦犯を除き日本軍民を迅速に帰国させた。日本の敗戦1週間前に満州に侵入したソ連軍が、満州と南樺太の日本軍民に対して行った振る舞いとは天地の差がある。

③毛沢東(1893~1976)¹⁷⁾

毛沢東と蒋介石¹⁸⁾は、日本軍の侵攻と戦う姿勢に大きな違いがあった。毛沢東は著書「毛沢東選集第2巻」のP3で「蒋介石政府は、日本侵略者との交渉を続け、日本侵略者と地方当局者とのあいだでとりきめたいわゆる平和的解決さえうけ入れた。そして、8月13日、日本侵略者が大挙上海に侵攻し、中国東南部における蒋介石の支配的地位がどうにも維持できなくなったとき、はじめて、やむなく抗戦を実行した。」と蒋介石を痛烈に批判している。青年時代日本留学の経験がある蒋介石と、来日したことがなく、マルクス主義史観で帝国主義日本を一貫して厳しく批判する毛沢東との違いがここにも表れている。また蒋介石の政治基盤は、財閥と大地主であり、西安事件¹⁹⁾までは日本軍と紅軍という内外の敵を相手に戦わざるをえなかった事情があった。

両者ともニュアンスの違いはあるが、日本軍閥を敵視し日本人民は敵でないという認識では一致しているが、日中戦争を通じて、二人の日本への姿勢には大きな違いがある。できることなら反共で一致する日本と平和の道が開けないものかと考える蒋介石の心理が、彼の日本像に込められているように感じる。反対に毛沢東の日本像は一貫してマルクス主義、反植民地主義、反帝国主義の立場に立ち、日本帝国主義を打倒するまで戦う姿勢に徹していたように思われる。

最後に、毛沢東が1936年7月16日、延安の洞窟内でエドガー・スノー²⁰⁾に話した主要部分²¹⁾を筆者が①~⑧にまとめ紹介する。日中戦に対する彼の考え方がよくわかる。

- ① 当面抗日戦の任務は、失われた全領土を取り戻すことで、単に長城以南に留まらない。
- ② 中国の主権をこれ以上犠牲にし、経済・政治または領土の面で妥協することで日本の侵攻を阻止できると思っている人たちは空想家だ。国民政府は過ちを犯してきた。
- ③ 抗日戦に勝利する条件は、反日民族統一戦線の結成、世界反日統一戦線の結成、日本の抑圧人民の革命的行動の3条件である。
- ④ 以上3条件の実現如何により時期は異なるが、究極的に日本は敗北する。
- ⑤ 但し、その間犠牲は大きく、全世界にとって、それは苦痛にみちた期間となるだろう。
- ⑥ 紅軍が人数・装備に勝る国民党軍相手に生き延びてこられたのは、解放区の人民の間に岩のように強固な団結を創りだしたからである。
- ⑦ 日本が中国の大半を占領しても、われわれは敗北しない。中国の領土は広い。日本は中国の西北・西南を封鎖できない。
- ⑧ われわれは、華北のみならず、揚子江下流域と南方の海港が既に日本の大陸計画に含まれていることを知っている。その上、日本海軍は中国の沿岸を封鎖し、フィリピン、シヤム（現タイ）、インドシナ、マラヤ、蘭領東インドを占領する野望を抱いていることも明らかである。戦争になれば、日本はこれら諸国を戦略基地として、英・仏・米を中国から分断し、南太平洋海域を独占しようと試みるであろう。

以上のまとめから、辺鄙な黄土高原で穴居生活を強いられている毛沢東が天才的な統率力と洞察力の持ち主だったことが分かる。日中戦争勃発1年前に、日本との戦争と国民党の誤りだけでなく、太平洋戦争勃発まで見通していた事実を知り、日中戦に対する日本の軍閥と政治家に代表される指導層の見通しの甘さを残念に思うのは筆者一人ではあるまい。彼の未来展望で唯一の誤算は、日本の革命勢力の蜂起を期待し予測したことであろうか。

3. 韓国（国号 1392～朝鮮、1897～韓国）指導者の日本像

最初に触れたように、明治の日本が、当時の韓国を対等の隣国と見なさず見下してきた結果犯した誤りは大きい。頑迷に時代遅れの鎖国をしてきた韓国にも原因がなかったとは言えないが、いきなり征韓論を唱え、列国の先頭を切って朝鮮の開国に成功した時結んだ日朝修好条約で、幕末に日本が列強に強要された不平等条約以上に朝鮮にとって不利な内容²¹⁾を押し付けては、善隣外交の始まりにはならなかったと考える。

韓国は1910年から1945年まで日本の植民地になった。日本の植民地支配に対する韓国人々の拒否反応は極めて根強く、1905年に保護国に組み込まれた時から反日義兵運動²²⁾が起り、その後もしばしば独立を目指す抗議行動や武装蜂起があった。4千年の歴史を持ち、強大な中国の支配と圧力にも屈服せず、団結して文化を守り通してきた朝鮮民族の不屈の抵抗力は、ポーランド民族

を思わせる。日本の植民地になって彼らが抱く日本像が良いはずはない²³⁾。また日本の植民地統治政策も拙劣であった。一方東南アジアで英国が行った植民地統治は巧みであった。原住民の文化・伝統を尊重し、同化政策はとっていない。

日本の韓国植民地経営は英国の対極にあった。同化皇民化政策、例えば神社参拝や学校・官庁での日本語と創氏改名の強制は愚かな統治事例である。内鮮一体化を唱えながら、大日本帝国憲法は韓国では施行されず、戸籍も内地とは別であった。土地と産業の収奪も恨みを買った。それゆえに、日本の植民地になってから韓国の近代化が進んだ側面がありながら²⁴⁾、その成果は韓国の人々から殆ど感謝されていない。

当時の韓国指導者である金日成と李承晩の回想録が見つからなかったため、後に韓国大統領になった金大中（1924～2009）²⁵⁾ が自伝²⁶⁾ の中で述べたことの紹介から始める。

（1）金大中の日本像

「6年生の時、朝鮮語の授業が廃止になった。ほんとうに悲しかった。『こんな世の中に生きなければならぬのだな』。幼心にもあんなに胸が痛んだことはなかった。学校では日本語だけしか使えなかった。」（中略）「木浦商業2年の時、創氏改名があった。朝鮮総督府の命令で姓と名前を強制的に変えた。韓国人にとって姓は命に匹敵するくらい大事だ。我々にとって姓は先祖代々引き継がれてきたものだけに、天から与えられたも同然ではないか。儒教でも、とくに姓を変えることは『換父易祖』とあって最大の不幸と考えた。血を偽り、祖先に背信する行為とみなされた。決然たる意志を示すとき、日本人は『命を懸ける』というが、わが民族は『姓を変える』という。日帝がそんな姓と名前を変えようとしたのは、まったく野蛮な暴挙だった。全国、全民衆が悲嘆にくれた。」²⁷⁾

（2）金日成の日本像

日本の植民地時代、代表的な独立運動指導者は、金日成（1912～1994）と李承晩（1875～1960）である。

金日成の資料として、「金日成選集第1巻（三一書房）、徐大肅「金日成」（講談社学術文庫）、白峯「金日成伝」（雄山閣）を参照した。

金日成は、貧しい小作農の子として、平壤郊外の景勝の地、大同江畔の方景台で生まれた。注目すべきは、小中学校の8年間、満州と韓国双方の朝鮮人学校と中国人学校に通学していることである。1931年に共産党に入党、32年に南満州で遊撃活動をする東北抗日連軍に加わり、紅軍の中で反日ゲリラ活動をした。その中で頭角を現し自分の隊を結成、満朝国境の白頭山周辺で日本の討伐隊と戦っている。彼はその後ソ連領に撤退し、戦後ソ連軍が北朝鮮を占領するに及んで帰郷し、北緯38° 戦以北の北朝鮮の指導者の地位を獲得した。

彼の植民地時代の日本像は、非常に厳しい。前掲「金日成選集第1巻」に記載されている彼の発

言から、日本に触れた三つの演説のそれぞれ一部分を引用する。

①革命運動 27 周年のために 1946. 3. 1. 27 周年記念演説

「27 年まえの 3 月 1 日²⁸⁾、全民族をあげて、強盗日本帝国主義に反抗した勇敢な精神を忘れてはならない。みずからの独立と自由のために、(中略) 仇敵日本帝国主義の打倒、朝鮮独立の完遂、というスローガンを高くかかげて大衆的に決起し、血をながし、日本帝国主義の銃剣のまえにひるむことなくたたかっていたこの民族的団結の精神を、われわれは忘れてはならない。」(前掲書 p6)

②重要産業の国有化について 1946. 8. 10. 発布にさいして演説

「日本帝国主義は朝鮮統治のあいだ、朝鮮人民の利益のために、朝鮮の工業を発展させたのではなく、朝鮮人民のやすい労働力を搾取する目的で、また朝鮮から工業資源を強奪する目的で、また日本の資本家どもの利潤を獲得する目的で、企業所を設置した。また、これら多くの企業所は、日本帝国主義が他国の人民と国家に対して侵略戦争をおこなうために必要とした軍需品をつくるために利用されたのである。」(前掲書 p113)

③青年の任務について 1946. 6. 11.

「朝鮮民族は過去半世紀のあいだ、日本帝国主義の野獣的な弾圧と搾取をうけてきた。青年も二重三重のひどい圧迫をうけた。だが、英雄的なソヴェット軍隊の力によって、朝鮮民族が解放され、同時に青年もまた解放された。(中略)

長期にわたる日本帝国主義の朝鮮支配が、青年奴れい教育を実施したけっか、朝鮮青年の頭の中には、ファッショ的思想の残滓がのこっている。だから、われわれは朝鮮青年の頭のなかの、こうした反民主主義的思想の残滓を一掃し、民主主義精神で、青年を再教育することが、民青の重要な仕事でなければならない。」(前掲 p45~46)

以上の三例から、朝鮮を植民地として支配した日本への激しい反感とソ連軍の参戦に強い感謝の念を抱いていた金日成の気持が伝わってくる。

(3) 李承晩の日本像

李承晩は、日本降伏後、亡命していた米国から帰国し、北緯 38° 線以南の南朝鮮(韓国)の初代大統領になった。彼は 1896 年独立協会結成に参加したが、韓国と日本官憲にあいついで逮捕され、1912 年米国に亡命、1918 年プリンストン大学で博士号を得た。1919 年上海で大韓民国臨時政府大統領になったが翌年失脚、再び米国へ亡命し、帰国したのは日本敗戦後である。彼は徹底した反共反日主義者で知られ、戦後「李承晩ライン」²⁹⁾を公海上に設定した。日韓両国の係争地になってい

る竹島をその中に囲い込んでいる。1960年彼の退陣を要求するデモが激化し引退、再び米国へ亡命し余生を送った。

彼の日本語版または英語版自伝、回顧録、直筆論説が入手できなかったが、唯一「政界往来」1952年2月号に掲載された李承晩「韓国と日本の相互融和」が入手できたので、筆者の要約を掲載する。この文は、政界往来社木舎社長が回答を要請した二項目に対するメッセージである。質問の第一は、アジア各国の友好関係強化に関する具体策如何。第二は、講和後の日本に何を期待せられるや。であった。

李承晩のメッセージ（要約）1952. 2.

第1問について

アジア諸国は各国が平等であるという考えを容認すべきである。一国再建のための特殊な計画は現在の疑惑を深め、かつての怨恨を再燃させるだけである。アジアの国民は西欧連合国の民主主義か、ソ連ブロックの侵略主義か、いずれかを選択せねばならない。二つの世界の間にあつては、中立の立場を希求するのは危険である。相互を利する通商・商業関係を極東の非共産諸国間に発展させるべきである。中共と通商協定を結ぶ国は、敵を強化するだけでなく、自国を弱体化し、地域の平和を危機に陥れる。

第2問について

日本の全自由人がかつての致命的軍国主義を拒否し、日本を真に民主主義国家とする決意を強調することが必要。このことは日本が過去の行為を心から後悔し、公平、正義、および均等な機会をもって隣国を遇する政策を実施することが求められる。日本が韓国との親善関係を復活するには、日本の政策が根本的にどの程度変化したかを示す必要がある。韓国は日本からの相互融和という精神に基づきあらゆる協力を即応する用意がある。

このメッセージを読んでも、李承晩は植民地時代の日本に厳しい日本像を抱き、過去の行為を心から反省し実践を求めていることがわかる。また彼が筋金入りの反共主義者であることが読みとれる。この時期が、朝鮮動乱勃発3年目にあたり、北朝鮮及びそれを応援した中華人民共和国と激しい戦闘が続いていたことを考慮して読むべきであろう。

4. 終わりに

蒋介石、毛沢東、金大中、金日成、そして李承晩の日本像を簡単に整理して筆者が感じたことは、戦後70年を経ても、私たち日本人は戦争と植民地支配が両国国民に与えた深い傷跡を忘れてはいけないということである。日本が中国のように国土が外国軍に攻め込まれ長年戦場になった経験がないことを、また朝鮮のように植民地に35年もならなかったことを忘れてはいけないと筆者は思う。しかし近年「シナ事変は近因からいえば全部中国側のせい」と藤岡信勝+新しい歴史教科書を作る

会編「歴史教科書の10の争点」徳間書店2007のP258で堂々と発言する論客がいる。事件の解釈は自由であろうが、少なくとも日本の政治指導者の言動がこのような人たちの考え方に共鳴すれば、日本は再び世界の孤児への道を歩み始めることになりかねない。選択してはならない道であると筆者は強く思う。

謝辞

筆者が使用した各種資料の著者、編者、翻訳者、出版社の方々に厚く御礼申し上げたい。またこの論文にコメントを寄せて頂いた松平喜美江氏（日本教育大学院大学講師）と関係資料検索に協力してくださった村井裕美子氏（日本教育大学院大学司書）に感謝の意を表したい。

注)

- 1) 中国と韓国（朝鮮）に限定する。
- 2) 日本人像を含む。日本観・日本人観でも可。
- 3) 原則として韓国と表記。但し原文が朝鮮の場合などはそれに従って表記。
- 4) 猪木正道「軍国日本の興亡」p3～p4（中公新書）1995
- 5) 毛利は朝鮮と中国で明治維新に相当する体制変革が起こらなかったのは、科挙の重さにあると論じている。「日韓中近代化比較考」（特にp187～p189）
- 6) 約8000人の留学生在が清国から日本（大半東京）に集まっていた。
- 7) 1866～1925 広東華僑出身。辛亥革命の指導者。中華民国初代臨時大統領 三民主義を標榜。若い時ハワイでついで広東、香港で医学を学ぶも革命運動に転身。清朝に追われ日本、米国で亡命生活も。「三民主義」岩波文庫1957
- 8) 中国浙江省奉化県の富裕な塩商人の家に産まれた。日本留学中に中国人留学生に軍事教育をする振武学校を卒業。在日中に孫文の知遇を得て同盟会に参加した。以下本文参照。
- 9) 1884～1944 広東省出身。民族運動に参加、1904～1906年日本留学中に孫文を知る。孫文没後国民党幹部として活動。日中戦争の最中重慶を脱出し南京に親日政権を樹立（1938）。1944病没。「汪精衛自叙伝」講談社1941参照。
- 10) 1855～1932 岡山市生、政治家。政友会総裁、首相。5.15. 事件で暗殺された。孫文の活動を支援。
- 11) 1871～1922 熊本県荒尾村生、孫文の革命運動に参加かつ援助。晩年浪曲師になるが、生涯孫文を支援。
- 12) 貝塚茂樹「中国の歴史下」（岩波新書）p156の文を短縮要約すると、「中国の革命運動家達が日本を基地として、それまでばらばらだった地域的な革命組織が、全国的革命組織の『中国同盟会』にまとまり、孫文がその指導者になった。後に革命成功後他の団体を統合し『中国国民党』に生まれ変わった。もし犬養・宮崎らが10年前に孤独な亡命客孫文を援助し、留学生在が密集する東京に革命の温床をつくらなかったら、この団体はできなかったであろう。」
- 13) 1915年4月に日本が中国につきつけた要求。第一次世界大戦で中国が真空状態になった隙を好機と捉え、ドイツの山東省利権譲渡をはじめ様々な理不尽な要求を強引に飲ませた。しかし中国国民の憤激を買っただけでなく、欧米列強からも顰蹙を買い、一部は撤回した。しかしこれは日本外交の大失敗とされている。
- 14) 家近亮子「蒋介石の外交戦略と日中戦争」（岩波書店）2012、山田辰雄・松重充宏編著「蒋介石研究」（東方書店）2013
- 15) 「暴を以て暴に報ゆる勿れ」p9～p18「日本国民に告ぐ」（白揚社）1947

- 16) 同上 p3~p8「暴を以て暴に報ゆる勿れ」。
- 17) 中国湖南省の農村で小地主の家に生まれた。省都長沙の師範学校卒。1921年中国共産党創立大会に参加。農民と土地改革路線を主張したが党主流に容れられなかった(1925)。その後、井岡山、次いで瑞金に解放区をつくり、臨時政府主席になった(1931)。長征途上の1935年に党内主導権を掌握、延安を根拠地に内戦と抗日戦争を戦い抜き、1949年国内統一を完成した。
- 18) 二人を比較した手頃な書物に、野村浩一「蒋介石と毛沢東」(岩波書店)1997がある。
- 19) 1936年12月、蒋介石は西安に至り、張学良、楊虎城に共産党討伐を迫ったが、二人は反対に国共両党が協力して抗日に当たるよう説得、聞き入れられないので蒋介石を拘留した。国民党、共産党双方が調停に乗り出し、最終的に蒋介石も連共抗日を受け入れ、分裂対峙から合作抗日へ大転換した。(中国高校歴史教科書 p636~638—明石書店2004より要約)
- 20) 1905~1972。米国人、コロンビア大学卒のジャーナリスト。1928年から1941年まで中国に滞在。中国とアジアの取材と執筆活動をした。「中国の赤い星」、「アジアの戦争」他アジア関係著述が多い。戦前戦後を含め中国共産党が取材の中心。
- 21) エドガー・スノー「中国の赤い星」上巻(筑摩書房)1995の、特にp120~p147に、毛沢東がスノーに語った「共産党の基本政策」と「日本との戦争」の概要が書かれている。筆者の要約文は、その部分から構成されている。
- 22) 朝鮮在住日本人に日本の領事裁判権を認めさせたのは、日本が欧米諸国と結んだ不平等条約と同じであるが、日本商品を無関税で輸入させる取り決めは、日本が結ばされた不平等条約以上に朝鮮にとって不利であった。
- 23) 保護国化をきっかけに起こった反日武装組織。解散させられた軍人が加わり活動したが、1908年のソウル進攻作戦が失敗してからは小規模なゲリラ活動を展開、一部は満州に逃れて独立軍になった。
初代統監伊藤博文は、韓国併合に反対であったが、統治が軌道に乗らず、韓国内・日本国内の伊藤への圧力もあって、桂首相・小村外相の併合論に最終的に同意(1909年4月)、同年6月統監も辞任、同年10月ハルビンで安重根に射殺された(69歳)。1910年8月韓国併合は事前にロシア、英国の承認している。
- 24) 日本のためもあったが、鉄道、港湾、道路等のインフラ整備はある程度進んだ。また両班士族のような封建的身分制度の弱体化も民衆の間に広まり、公立普通学校進学率も上昇した。詳しくは、趙景達編「植民地朝鮮」(東京堂出版)2011他を参照されたい。
- 25) 全羅南道出身の政治家。韓国民主化と南北朝鮮の融和に尽力し、2000年ノーベル平和賞を受賞。但し毀誉褒貶が激しい。1972年東京のホテルに宿泊中韓国秘密警察に拉致され韓国へ連れ戻された事件、さらに1980年光州事件で内乱に関与した罪で死刑を宣告された。後に減刑され米国に亡命。1998~2003年大統領在職中に北朝鮮に対し宥和政策(太陽政策)を唱え南北会談に成功、
- 26) 金大中自伝I「死刑囚から大統領へ」(岩波書店)2011
- 27) 同上 p14、p17~p18
- 28) 第一次大戦講和会議開催時に提唱された民族自決主義に鼓舞され、1919年3月1日民族代表33名の名前で独立宣言書が国内外に発表された。ソウルで始まった万歳デモは全朝鮮に広がり、非暴力運動で始まった運動が、しだいに暴力・破壊行為を伴うようになり、日本は武力で弾圧した。(韓国の固定高校歴史教科書 p393~397 明石書店1997より要約)
- 29) 1952年1月に朝鮮半島周りに設定した公海を含む海域の境界線。一部日本の領海を含む(対馬の北端沖海域)。第二次大戦後日本漁業を規制したマッカーサーラインが講和条約成立で撤廃されたことに伴い、韓国周辺海域で日本漁船が操業するのを防ぐ目的で一方的に設定された。その結果、拿捕され韓国内に留置される日本漁船が相次いだ。1965年日韓漁業協定成立に伴い自然消滅した。

久保田 武 研究ノート：東アジアの日本像

－韓国併合後と日中戦争期の両国指導者の言動を中心に－へのコメント

松平喜美江（日本教育大学院大学 学校教育研究科 講師）

久保田教授は、日本教育大学院大学紀要第6号に論文「東南アジア諸国が抱いた日本像－日本占領期を中心に－」を寄稿され、東南アジア諸国で使用されている教科書の記述から各国の持つ日本像を紹介された。

この研究ノートは、同時期に日本が占領していた韓国と、日本の侵略戦争と戦っていた中国の指導者たちの見た日本像を、それぞれの指導者の回顧録、記載された談話、研究書、伝記などの史料をもとに紹介されたものである。

両国の人々を苦しめた日本軍の恥ずべき行為を、指導者たちは赤裸々に、その手記に、回顧録に詳細に記録している。これらは日本の侵略政策を物語る貴重な第一級の史料であり、史料の研究が進めば、日本の東アジア侵略の実体が究明されるだろう。

日中戦争期の中国の指導者蒋介石は、日本に留学した経験から日本人に好意を持った人物であったことが、史料から読み取れる。「中国は日本軍を敵とするが、日本民衆を敵とするものではない」と述べ、終戦時には「暴を以て暴に報ゆる勿れ」と自国民を戒め、日本政府に賠償を求めている。また、敗戦で帰国する日本兵に「日本は空襲で焼け野原となり、食料が無く困っているようだ」とお米を持たせたという話もあり、これに感謝の念を込めて奉納したといわれる蒋介石の胸像が日蓮宗中山法華経寺境内に建っている。毛沢東は反帝国主義の立場から日本を厳しく糾弾する。現在のぎくしゃくした日中関係の根っ子はここにあるのではないかと思える。

韓国併合による日本の植民化政策は韓国語の禁止、創氏改名など、日本への同化政策を強制したもので韓国の人々の心に大きな傷跡を残した。反日運動の指導者金日成は日本の敗戦後北朝鮮の指導者になったが、彼の日本像は厳しく、いまだに国交は回復していない。同じく日本の敗戦後、大韓民国の大統領となった反日運動家李承晩の日本像もかなり厳しいものであったが、講和後の日本に期待するものとして「過去の行為を心から反省し、公平、正義、および均等な機会を以て隣を遇する政策を実施すること」をあげている。

戦後70年経っても両国と日本の間には摩擦がある。ドイツとポーランドのような和解がなぜできないのだろうか。

この研究ノートで久保田教授は、和解の鍵を提示してくださっている。日本人は戦争と植民地支配が両国に与えた深い傷跡を忘れてはいけないということだ。そして、謝罪すべきものにはきちんと謝罪すべきということだ。

今、日本の政治は危険な曲角に立っている。今こそ過去を見つめ直して、日本が抱える現在の諸問題を私たち一人一人が真剣に考え、真の和解への努力をすべき時なのだ、感じさせられたテーマであった。若い方々に是非考えていただきたい重要な問題提起であると思う。